まちのひと文庫

城東図書館 2025年1月17日～2月19日実施

まちのひと 梅本 昴佑さんの紹介本リスト

「うめ書房」代表

深夜特急 1～6　沢木 耕太郎/著　新潮社

こちらは既に読まれた方も多いかと思います。また、テレビドラマ化もされておりますので、ご存知の方も多いのではないでしょうか（テレビドラマ『劇的紀行 深夜特急』として）。ルポライターの沢木耕太郎氏が、香港からバスを使ってイギリス・ロンドンまで向かう陸路の冒険です。

実は、私が深夜特急を初めて読んだのは二十歳前後の時でした。それまで、「深夜特急」の名前は知っていたと思いますが、実際に読んでみたときには衝撃を受けました。私は本の文章を目で追っているだけなのに、まるで、沢木氏の隣でバスにゆられ、ボロ宿に泊まり、現地の飯を食べ、現地の方と会話をしているかのような光景がまぶたに浮かんでくるのです。『深夜特急』を読んで、私も同じように旅に行きたいと思い立ちました。沢木氏のように数ヶ月間、複数の国を巡る、ということは出来ませんでしたが、予定（旅の計画）を決めずに、行き当たりばったりの旅に出かけることが出来ました。そんな勇気をくれたのが、この『深夜特急』です。

新詳高等地図 最新版　帝国書院

地理好き、地図好きの方にとって、無くてはならないモノ、そう地図です！（笑）

『新詳高等地図』を初めて手にしたのは高校生のときでした。勉強が特別好きでは無かった私ですが、地図帳を見るのは大好きでした。授業中、先生から指示されてもいないのに勝手に地図帳を開いては眺めてばかり。自分の住んでいる地域から、世界中のあらゆる所まで。「へ～、こんなところに島があるのか」「こんな地名の場所もあるのか」・・・と。地図帳ばかり見ていたせいか、授業内容は頭に入っておりませんでしたので、当然、成績が悪かったのですが・・・。

そんなある時、私は大好きな（！）地図帳を失くしてしまいます。どこで失くしたのか、今となってはもう記憶にもありませんが、このことを先生に相談すると、なんと地図帳を頂けたのです！それは、平成 16 年（2004）に出版された『新詳高等地図 ー最新版ー』でした。平成 16 年と言えば、私は未だ小学生。最新では無いけれど、最新版の地図帳を見ながら、世界中に思いを馳せていた青春時代でした。

海うそ　梨木 香歩/著　岩波書店

主人公は地理学者（人文地理学が専門）の秋野。物語の舞台は、昭和の初め頃の南九州の遅島。そこは、かつて修験道の霊山があったとされ、廃寺院の遺構に魅力された主人公は調査に向かいます。そして、地図に残された“海うそ”という言葉の正体を確かめるのです。時を経た 50 年後、偶然の巡り合わせか、再び遅島を訪れます。そこで秋野が見たものは、何を意味するのか。

舞台の遅島は著者が考え出した架空の島です。しかしながら、読み進めるうちに、実際に存在するのではないかと、日本地図を広げて確認してしまいそうになります。それほどにリアリティーのある物語だと思います。

南九州の歴史や文化、自然に関する書籍も多数参考にして書かれているので、本書を読んでいると、実際にフィールドワークをしている気分になります！

星の王子さま　サン=テグジュペリ/作　岩波書店

聖書の次に広く読まれている本と言えば・・・そう、『星の王子さま』です。

実際のところ、本当に聖書の次に広く読まれているのかどうか、私もよく分かりません。聖書の次、というのも何だか気になりますが。

『星の王子さま』を初めて読んだのは小学 6 年生のとき。教室を出た廊下の隅の方に、メダカの水槽と寂れた本棚が置いてあり、本棚には『学習漫画 世界の伝記』や『はだしのゲン』、『ハリーポッター』などの本が置かれていました。その中に『星の王子さま』の作者、サン=テグジュペリの学習漫画も置かれていました。それを読んで、私は『星の王子さま』の存在を知り、なけなしのお小遣いから、数百円の小銭を握りしめて、本屋へ向かったことを覚えています。しかしながら、小学 6 年生には『星の王子さま』は早すぎました。今、この年齢（年齢は伏せますが社会人です）になり、読み返してみて、初めて心に刺さるモノがあります。“大切な物は目に見えない”。あまりにも有名過ぎるかもしれませんが、正しくそうだと思いました。

最後の秘境 東京藝大 天才たちのカオスな日常　　二宮 敦人/著　　新潮社

“芸術大学（藝術大学）”とは、一体どういったところなのか？この本の表紙を見た時から、頭の中で考えては離れませんでした。舞台は、東京藝術大学。いざ、読み進めると天才たちのカオスな？（素晴らしい）学生生活を垣間見ることが出来ます。大学の生協でガスマスクが販売されていたり、キャンパス内にホームレスの方がいたり、親不知を抜きに行くことさえもままならなかったり、かたや、学生結婚したり・・・本当に様々で、十人十色だと思いました。

日本には数多くの芸術系大学が存在します。全ての芸大生が、本書に書かれているような方々ばかりでは無いと思いますが、普段生活をしていて、あまり馴染みのない芸術系大学の一端を知ることができるので、読んでいて楽しい内容だと思います。

今では大人気ロックバンドでボーカルをしているあの方も取材に登場します！（藝大出身だったのですね）

TOKYO 一坪遺産　　坂口 恭平/著　　新潮社

誰しも子どもだった頃は秘密基地の一つや二つあったのではないでしょうか？あるいは、自宅のクローゼットや、押し入れの中に布団を敷いたり、机やライト、ゲーム機などを置いたりして、自分だけの小さな世界を創り出したことはありませんか？（ドラえもんのような感じ）また、そこにワクワクした感情があったのではないでしょうか？

日本の人口の約1割が集まる巨大都市・東京を舞台に、“たった一坪”の土地を、あたかも自らの国のように、自由な発想で使いこなす人たちが主人公です。そこには“暮らす”ということに対して、既存の考え方を打破してくれるような人たちばかり。境界線に拘らずに、もっと自由でいいんだ！自分のワクワクを大事にしたい！そう思える本でした。

自分をいかして生きる　　西村 佳哲/著　　筑摩書房

働き方研究家の西村佳哲氏による、仕事や働き方について書かれた本です（全部で 3 部作あり、本書は第 2 作目。第 1 作『自分の仕事をつくる』・第 3 作『かかわり方の学び方』）。

多様な生き方や働き方が可能となった現代ですが、働くことや人生、生き方のあり様について考えさせられる内容です。特に、好きな箇所は、アメリカ人のパッツィーさん（ロサンゼルスで inn を経営）へのインタビューを通じて受け取ったメッセージです。

「はじめればはじまる」 逆にいうと「はじめないかぎり、何もはじまらない」

私自身、今でも「自分は何をしたいのか」、「今していることが本当に正しいのか」といったことを考えてしまいます。

正解は分かりませんし、答えがあるかどうかも分かりませんが、とりあえず、やっていこう！と思える本でした。

「研究室」に行ってみた。　　川端 裕人/著　　筑摩書房

本書は、中学生や高校生などの若者向けの“ちくまプリマー新書”から出された本ですが、大人の方が読んでも楽しめると思います。内容は、文筆家の著者が、科学や技術などの学問研究に関して、実際に研究の最前線で活躍されている研究者にインタビューをする、というものです。

登場する研究者は、サバクトビバッタの研究者（有名な方！）、宇宙船開発に携わるエンジニア、バイオロボティクス研究者、新しい元素を発見した物理学者、宇宙エレベーターの開発に携わる若き技術者、そして、最後は哲学と並び最古の学問とされる地理学の研究者が登場します。

一見すると、理系の読み物では？と思ってしまい、手に取るのを躊躇してしまいそうになります。しかし、最後のあとがきで著者も書かれているとおり、社会に出ると「理系」も「文系」も区別が無くなります。今後の進路などで悩まれている中学生や高校生の方にもオススメです。

※2014 年 12 月初版。登場する方の所属や研究内容等は当時のものです。

表示 4.0 国際（CC BY 4.0）
転載等の際は “大阪市立城東図書館「まちのひと文庫」推薦文“との表記を入れてください

大阪市立城東図書館
大阪市城東区中央 3-5-45 06-6933-0350
https://www.oml.city.osaka.lg.jp/